

きょうと福祉倶楽部だより

2022年 9号

在宅介護を成功させるためには、様々な在宅に関わる施設とそのスタッフが事業所の垣根を越えて「ともに」高齢者を支える事が重要です。そのチームの一員ともいえるデイサービスセンターの管理者のかたに日頃デイサービスを通じて感じていることを寄稿して頂きました。

家族が言っているから

福祉サービスに携わる者にとっては、少なからず日常において日々様ざまな葛藤があります。

利用者の方やご家族との関係づくりに悩むこと、支援自体が上手くいかないこと、職員同士の価値の相違等、将に文字通り、「三步進んで二歩下がる」を繰り返しながら、僅かずつ前へ、また一歩前へ歩みを進めています。そのたくさんある日々の悩みの一つ

「愚行権」という考え方

愚行権—例え愚かざりし思考や行為であったとしても、本人が希望する限「自己決定」を追求すると誰も抑止できないという思想。

利用者の皆さんがよく口にされる「やっぱり家がええ！」

これは愚行権の行使なのでしょうが 非常に迷い、悩むところであると思います。在宅生活を継続するにあたり、例えば、認知症があり～できない、家族が～できない等、さまざまな状況により、諸般の理由があるかと思えます。

敢えて過激な表現をしますと、出来ない何かを探さずに、たとえ「不可能だろう！」と想われる愚かざりし考えや希望であったとしても、本気で共に考え、悩み、気持ちを代弁してくれる「私の味方（代弁者）は誰か」ということであると思います。ケアマネジャーでしょうか？訪問看護師でしょうか？はたまたデイサービスやデイケアの職員でしょうか？

孤独を感じるのには死を意識するよりもっと辛いとも言います

では、自分自身に理解者が居ない（味方がいない）事を自覚する時、人が抱く感情とはいかなるものでしょう？

ある種、先の見えない恐怖感にも近いのではないのでしょうか
この先の生活をどのような向上心をもって営めばよいのでしょうか？

私含め、福祉に携わる従事者全てに問いかけられる問いであるように思います。本人にとって自宅で暮らせないこと自体の敷居が下がっていないだろうか、...
（福祉に携わる支援者自身が下がっていないだろうか、...）

皆さん自身も日常的によくお聴きになることば
「家族が言っているから」

言うまでもなく、ご家族の想いや立場ももちろん過ぎるほど大事です。様々なご苦労や背景が、様ざまな決断の素となるのは当然のことです。福祉職として皆さんにもご一考いただきたいこと。

「家族が言っているから」

では、この言葉に福祉職としての専門性はどれほど深く含まれているのでしょうか
福祉職が前述の代弁者としての役割も担う中で、家族の代弁者である事を最優先事項するが故に、最も専門性が求められる「私（本人）の代弁者」たる見地が疎かになっていないだろうか？

私が一番気になることば 「家族が言っているから」
本当に気になる、大切だと感じるのはその言葉の続き
「家族が言っているから（関係や立場が悪くなるのが嫌だし、その通りにします）」
であるのか？

「家族が言っているから（仕方ないと思い、諦めている）」であるのか、
皆さんの本心はいかがでしょうか？

「家族が言っているから」を何かの万能語として、安易に遣っていないでしょうか？

私に唯一の愚行権の行使をさせてもらえるとするなら

「家族が言っているけど、本人の想いをどうにか叶えてあげたいと思う！」
そんな家族も本人の真の想いにも味方できるある意味、欲張りな真剣な福祉職がこの市に溢れますよう願うことです。

某デイサービス
管理者